
エブロード王国物語 - 異界の魔獣使い -

hiro33

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エブレード王国物語 - 異界の魔獣使い -

【Nコード】

N1933Y

【作者名】

hiro33

【あらすじ】

魔道船の事故に巻き込まれ大河に投げ出され、『死に戻り』・『黄泉返り』と呼ばれる現象により契約していた精霊とは契約廃棄となり、気づけば猫型魔獣と小人族に懐かれることになり、エブレード王国を中心に物語は進みます。

異界の魔獣使い - プロローグ - (前書き)

はじめまして初投稿です。最後まで続けるようにがんばります。投稿できる時が不定期になると思います。感想いただければ嬉しいです。

異界の魔獣使い・プロローグ・

プロローグ

その日、王都エブリード付近にて前代未聞の事故が発生した。

魔道船・方舟ヴァンガード・ 最大収容人数1500人
事故当時の乗員乗客は1300人

巨大な飛行船ヴァンガードは
王都を出発後、乗員乗客を巻き込み大河へと墜落する。

死者行方不明者1246人生存者54人と言われ、今世紀最大の魔道船事故として
後世の歴史書に記されることとなる。

乗員乗客にとって不運だったのは、ヴァンガードが大河ではなく大地に墜落
していればまだ生存者が多かったはずであった。

本来ならば墜落しても生存できるように、魔道師が施した魔方陣により乗員乗客の
命が助かったはずなのだが、墜落した場所が悪すぎたのだ。

大河ムーリルヴァの川のご真ん中へと墜落し、
乗員乗客1300人を乗せたヴァンガードは大河に沈んだのだ。

泳げる者がいても大河に住む水棲の妖獣、魔獣の餌となり、運の良い乗員乗客で

幸運だった泳げる者と、ごくわずかな魔道の使い手のみが生存することが出来たと

言う、史上最悪な大規模事故であった。

岸からの救助を行おうにも、大河にいる数多の水棲の妖獣、魔獣により近づくことも

出来ず大河は乗員乗客の阿鼻叫喚と水棲の妖獣、魔獣の歓喜の咆哮が続き、

大河が犠牲者の血で赤く染まったと後世に伝えられた。

魔道船・方舟ヴァンガード・空を飛ぶ飛行船の先駆けであり、先駆者としてつけられた。

ヴァンガードの名は、皮肉にも後世に大規模飛行船事故における先駆者として

名を残してしまったのである。

異界の魔獣使い 1

1

魔道船・方舟ヴァンガード・の事故より一月が経った。

王都エブラードより公式発表として、魔道船・方舟ヴァンガード・の乗客に

五大英雄の一人、傭兵王ルクサス公の孫の死亡を公式に伝えられ喪に服することとなる。

五大英雄とは

傭兵王ルクサス公

騎士王ヴァルチス公

精霊巫女姫ルチア

魔道王ガーリア公

盗賊王ムルサ公

の5人を指す。

そして彼らと共に魔族の脅威より世界を救った救世主として

王都エブラードの王にして、異界より流れてきたユウキ・スガワラを聖王として

現在の王都エブラードはまとめられている。

話は一月前に遡る。

大河ムーリルヴァに起きた、魔道船・方舟ヴァンガード・の事故より数時間後である。

「なんとか岸につかねば」

大河ムーリルヴァに魔道船より投げ出され数時間、今だ大河から上がれず

流されるまま船の残骸と思われる木片につかまりなんとか生存してはいるのだが、

その命もまもなく尽きてしまうのではないかと、思わずにはいられない。

投げ出された直後は酷い有様だった。

泳げる者は、片っ端から水中へ引きずりこまれ溺死させられ死んでゆく。

魔道船が大河に沈んだことから、大多数の乗船乗客が今だ魔道船の中にいるはず

だろう、そしてその者達もすべて脱出出来ぬまま溺死していったことだろう。

「悪運が良いのか悪いのか…ありえない世界だ」

とりあえず五体満足には生きている。怪我もなく、今の所妖獣、魔獣に気づかれてはいない。

これがもし怪我でもしていれば血の臭いから妖獣、魔獣に襲われていたことは間違いはないはずだ。

自分が助かった理由は、投げ出された直後に余り動かなかったことではないかと考える。

どれだけ流されこうしているのかもわからず、岸にたどり着こうにも川幅が広すぎるのだ。

流れは緩やかで、周囲に散乱する漂流物を見れば生存している者は自分だけ。

流れに逆らわず、なんとか岸へと近づこうとしているのだが、なかなか難しい。

頼みの契約精霊を頼ろうにも、精霊との証である紋様が肌より消えている。

考えられることは、精霊が契約を廃棄したと言うこと。

「まさか死に戻りか」

ありえなくはない。

大河に投げ出されたショックかはわからないが、一時的に心肺停止でもした可能性がある。

契約精霊とは、自分の能力になってもらうべく精霊と契約することだ。

強制的に契約することと、自然に契約出来る2種類のやり方がある

のだが、自分の場合は前者だった。

自分が生まれた時に、家族が強制的に精霊と契約させたのだ。

自分としては物心つく頃からいた精霊だったが、契約が廃棄された状態だと言うことは自分が

一時的にも死んだからとしか思いつかない。

精霊との契約廃棄には契約した者が死亡した場合と、契約した精霊から愛想つかされるかなのだが、

自分の場合は一時的でも心肺停止したからとしか思いつかない。

精霊は契約者が死ぬと契約解除されてしまったため、「死に戻り」、

「黄泉返り」した者は

契約した精霊との契約が解除されてしまい、今まで使役していた精霊が使えなくなってしまうのだ。

「死に戻り」、「黄泉返り」はそれほど珍しいことではないのだが、噂では冒険者や傭兵、

騎士がそうなってしまうと、今までのように活動することが難しくなるため、新たな精霊と

契約しなおさなければならなくなってしまつとの話だ。

「なるようにしかならないかもだが、諦めるのも癪だ。こんな面白そうな世界だし」

死ぬかもしれないと、諦めるのは簡単だ。

だが、こうして生きている以上命を捨てる気もないのも確かだ。

そろそろ掴まっているこの木片よりも、安定した大きさの浮遊物はないかと周囲を見渡せば、

樽が浮いているのが見える。

掴まるのは不安定があるが、確実に沈まないものとなるとそれくら

いしか見当たらないので、移動する。

樽は自分がなんとか抱え込める大きさだった。
これを浮き輪にすこしずつ上げられそうな岸を探して移動する。
どれほどの距離を、流されているのか分からないがなんとか移動することは出来そうだ。

『……フギャ……』
掴んでいる樽の中から何かの声が聞こえた。

「????」
空樽ではなかったのだろうか？

『だから……で……』
声は動物のようなもの？と言葉のようなもの？が聞こえるのは気のせいだろうか？

「樽の中に誰かいますか？」
コンコンと樽を叩いてみる。

何も聞こえず、自分の気のせいらしい。
「長時間の漂流での幻覚か……」

低体温状態になりつつあるのだろうか、これは早急に岸めざして上陸せねばと考える。

「幻覚酷くなる前に岸目指すか。ここまでくればこれに掴まる必要なさそうだしな」
樽からはなれて泳いで岸を目指すことにした。ここまでくれば妖獣、魔獣の気配が薄い。

『まっ！待て……』

どうやら空樽には誰かいたらしい。

「こんにちわ。誰かしりませんが、人間じゃなさそうです」

『お願い岸へ一緒に…』

樽の中に何かいるか分からないが、同じ魔道船に乗っていたよしみで樽ごと岸まで泳ぐことに変更する。

「とりあえず岸まで、なんとか泳ぎつくようにするので、無事ついたら樽から出してあげます。ただし

襲ってこないで下さい。人族じゃなさそうだし」

『分かった…』

何が樽の中にいるのか気になるところだ。

異界の魔獣使い1（後書き）

続いて投稿です。 よろしくおねがいます。

異界の魔獣使い2

2

たどり着いた岸边は、漂流物がたどり着きやすい形状になっているのか、

そこかしこ魔道船の残骸や荷物とおぼしき物、余り見たくはない人が人だった物の一部が流れついている。

「さすがにきつい……」

なんとか樽を抱え、やや開けた場所へ移動した。あとで流れ着いた荷物を確認してみようと思うが、濡れそぼった服が気持ち悪い。

「樽開ける道具探すので、待っててください」

自分の持ち物の確認が先だ。
腰に挿したはずの精霊憑きの剣は、やはりない。
腰に付けた冒険者用の道具袋2つは無事だった。

これは一部の高レベル冒険者のみが、所持出来る道具袋で重さを感じずに持ち運び可能なため旅の必需品だ。

これを作った者に気に入れないと手に入れられないと言う物である。

これが流されなくて良かったと思う。

道具袋から、樽を開けるのに使えそうな小剣を取り出す。

「とりあえず開けます剣先に気をつけて」

ぐりぐりと少しずつ樽の縁に小剣を差込なんとか蓋を開ける。

『やった！出られたわ感謝する人間』

飛び出して来たのは真っ白な子猫？体全体に模様が入って……………

「…………驚いた白雪彪はくせつひょうの幼生体ですか」

まんま子猫にしか見えなくはないのだが、知るものが見れば白雪彪の幼生体だと分かるはずだ。

雪山に生息し、その毛皮は王侯貴族に好まれるSSランクの魔獣。

知能が高く狩るのはたやすくはないため、滅多なことでは狩ることが不可能な魔獣である。

『わかるの？』

剣呑な眼差しで見ないでほしい。

「分かる人は分かるはずですね。そのままじゃ何なので、首輪外していいですか？」

魔獣用の人にしか外せない仕様の隷従の首輪が、邪魔だろうと思う。

『えーこれ結構気に入った首輪なんだけどキラキラして』

見た目は確かに綺麗な宝飾をほどこしているのだが、隷従の首輪で追尾機能付のはずだ。

「付けたいのはかまいませんが、それ追尾機能付で隷従の首輪ですよ。付けた人間が貴方が生きていると分かれば追っ手がくるはず」

ちなみに人族や人型の者を、奴隷化する首輪は隷属の首輪といい魔獣用の首輪は

隷従の首輪と呼ぶ細かな機能の違いがあるらしいのだが、詳しくは知らない。

道具袋から自分の代えの服を取り出しつつ、濡れた服を脱ぎながらそう教える。

『ええっ！外して頂戴！人間！』

知らなかったのか、外せ外せとうるさい。

「着替えさせてください。まああの事故の混乱で、直ぐは大丈夫なはず」

なにせあれだけ規模の重大事故だ。

どれだけ下流に流されたのか分からないが、墜落した周囲はすごいことになっており、

それどころではないはずだ。

「白雪彪さん貴方の名前は？私は人間と言う名ではなく、スズ……いえセルファです。人族の男になります」

『名前なんてないわ。気づいたら人間のところにいて、あの船でどこか連れていかれるとこで……』

なんとか自分に起きたことを説明してくれた。
ハンターにでも生後まもなく捕まったのだろう。

「そうでしたか。では仮の名前を付けてもいいですか？名があるほうが呼びやすいですね」

なんとか濡れた服をすべて脱ぎ着替えの服を着込む。
やはり精霊契約の証は体から消えていると思いながら。

『……出して！……』

白雪彪の入っていた樽からまた声がする。

どうやらまだ何か入ったままだったらしい。

「まだ何かいるようですね……」

『忘れてた……』

白雪彪は自分が入っていた樽に顔を突っ込んで、何かを銜える。
樽には何がいるんだと、セルファがみれば、小人族3名と何か分からないコブシ大の卵が1つあった。

異界の魔獣使い2（後書き）

連続投稿です。

異界の魔獣使い3

3

「野営の準備した方がよさそうです」

白雪彪が気になるが、詳しいことは野営準備を整えてからのほうが安全だろう。

「白雪彪さん詳しくは野営準備後と言うことで、この場所は完全に安全かわかりませんので少し移動します」

まあ逃げたきや勝手に逃げてくれてかまわないのだが、くつろげるよう野営準備してからで遅くないだろう。

セルフアは野営準備の為に、道具袋から結界石を4つ取り出す。精霊契約が切れてしまい、精霊魔法が使えなくなってしまうた不便さは多少あるのだが、結界石さえあれば周辺にいる魔物を寄せ付けることはないだろう。

ただし、すでに結界の中にいる魔物に関してはその限りではないが野営準備に必要な広さの四方に石を置き。中心に魔よけの魔方阵を展開させると、

大人が3人余裕で眠れる大きさのテントを取り出し設置する。

テントの幅を利用して紐を結び、濡れた衣類をそこにひっかけ濡れた衣類をそこで乾かすことにする。

魔方阵からそれほど離れていない場所に火の準備をすることにして、その辺に落ちていた枯木を集められるだけ集め、簡易竈を作るための石もいくつか探し出し準備する。

「こんなもんかな」

安全面が気になるところだが、とりあえずは休む必要があるだろう。

『セルフア感謝するわ。人間でも良いやつはいるのね』

隷従の首輪をはずしてもらって白雪彪は、毛づくろいしつつそう告げる。

「さてそれはどうでしょう。それよりも、これからどうしますか？」

所持していた簡易食で簡単な食事をすませ、ぎこちない様子の小人族へ聞く。

樽の中にいた小人族は女の子2人と男の子1人だった。

お姉さんな感じがエル、やや恥ずかしがりな子がミル、男の子はカイと言う名で

白雪彪の世話をする為に船に乗せられたらしい。

彼らも無理矢理、住み慣れた森から連れ去られ人間に隷属を強いられたらしい。

「王都では隷属する者は、犯罪者以外は禁止されたはずですが、

どこにも馬鹿はまだまだいるようです」

『セルフアさんありがとう』

『ありがとな』

『ありが…とうございます』

助けてもらった礼を言われるのは悪い気はしない。

小人族をこうして近くで見るのははじめてだが、なかなか小さく愛玩用に

隷属させたくなる気持ちも分からなくはない。が、セルフア自身隷属することには反対だ。

人であり他種族であろうが、犯罪者でない限り隷属し、自由を奪う権利はないと思っているからだ。

『セルフア、名前頂戴。名無しはなんか嫌だし』

「そうですね。貴方は白雪彪ですし、安直ですがシラユキはどうでしょうか？」

異界語の言葉ですが、白い雪と言った意味ですが」

異界語、聖王と呼ばれるユウキ・スガワラの故郷の言葉だと教える。

『シラユキ…私はシラユキ！わかったわ』

「気に入ったようですねによりです。省略して呼ばせなければユキだけでも良いでしょう」

『セルフアさん助けて貰ってなんなのですが、お願いがあるので』

小人族のエルがそう告げる。

「なんでしょうかエルさん？」

だいたい何が言いたいかわかるような気はするが、セルフアは聞いた。

『森へ帰りたいのです。私たちが住むエザイラの森へ・・・連れて行ってくれませんか』

やはりと思う。元居た場所へ戻りたいと誰もが思うことだ。

「…残念ですが、今は無理です」

そう言われた小人族が泣き出すのは当然で、助かった喜びもつかの間奈落へと落とされた気分だろう。

異界の魔獣使い3（後書き）

連続投稿です。よろしく願います。

異界の魔獣使い 4

4

『ちよつとセルフア、そんな言い方な...』

怒ったシラユキがガシガシと、セルフアの腕に噛み付いてくる。
シラユキに噛み付かれるのは痛い、生きた毛皮の手触りは格別なものだと思う。

「泣かないで、今はと言っただけです。痛いですよシラユキ！
こつちの理由も聞いてからにしてください」

こんなシラユキはかわいいなあと、のんきに思いつつも、現在の自分の状況を話すことにした。

「見て分かんと思いますが、私は人族で本来なら精霊魔法を使用していました。精霊魔法は誰でも使えるようになるわけでないのはわかりますか？」

『わかる... 私たち捕まえた人間は使えなかった。雇われた冒険者が使っていたのは見た』

ミルが泣くのをなんとか堪えつつ呟く。

「人族では、冒険者になるのはだいたい精霊魔法が使える者や魔獣使いだけです。私も冒険者ですが、コレを見てもらえますか？」

道具袋から取り出したのは、冒険者ギルドのランクカードだ。

セルフア・??????

AGE:112

SEX:???

JOB:???

HP:???

MP:???

INT:8064

DEX:216

VIT:537

STR:142

AGI:467

LUK:723

称号:???

契約精霊:???

冒険者ギルドランク:???

『年齢112!って人族じゃ。他も人族じゃありえない!』

カードを覗き込んで見るカイがありえないと叫ぶ。

「ええ、カードがバグっています。本来ならこんな数値はありえないですが、

私のこの体の年齢は19です…」

普通ならギルドカードがこのようになることはありえないのだ。

「今は無理と言った理由がコレです。困ったことに今の私では精霊

魔法も使えません」

さてどうしたものかと思う。

カードを見た限り表示されている数値はめちゃくちゃだし、自分のギルドランクさえ分からない状態になってしまっているのだ。

「死に戻り……ですか？」

エルがそう呟いた。

「知ってましたか。多分としか言えないのですが、こうなる前に私は複数の精霊と

契約してました。着替えた時にすべて確認しましたが、契約していた精霊の紋様は

すべて消えています。今の私では、貴方たちの言うエライザの森へ辿り着くことは

非常に難しい。なので今は出来ないと告げただけです」

依頼されてエライザの森まで向かうのはかまわないのだが、精霊無しでは無理としか言いようがないのだ。

エライザの森は最低でもBランクの魔獣が出没するし、個人で行くのは難しくどうしてもチームを組まないと無理なのである。

「可能なのは、ふたたび契約してくれる精霊を探してからとなります。それが何年かかるかわからないので直ぐは無理ですし、早く帰りたいと思うのであれば、私など無視してランクの高い他の冒険者に依頼するしかないですね」

「死に戻り」も困ったものだと思う。今までしてきたことがすべてパアになるのだから。

ただ「死に戻り」にも1つだけ幸運が付けられる。精霊契約を廃棄される代わりに、あることが戻るのだ。

それを今は、セルフアも話すつもりはない。

『ねえねえ…セルフア契約って他のとは出来ないの?』

シラユキがふと魔獣である自分の今を考えて思う。

自分はかなり珍しい魔獣と言うのをセルフアから聞き知った。

今の状態では、また誰かに連れ去られる可能性もあるんじゃないだろうか…

どこから連れ去られたのか、両親の居る場所さえ分からないし、これから何かを言うとも思いつかない。

「精霊以外でも出来ますよ。魔獣使いと言うのもありますし……契約ですか」

シラユキを見て思うこのままでは、シラユキも危険に晒されるだろう。その希少性さゆえにだ。

『はい…ならアタシ、シラユキは契約する！セルフアとなら契約！珍しい魔獣は誰もが欲しがらるならセルフアがいい!』

狙った獲物を離すまいと、爛爛と目を輝かせたシラユキが言う。

魔獣らしくないのは、生後まもなく連れ去られ人間と過ごしてきたからだだろうか？

いや小人族の3人が、世話していたからだろうか？

こうも魔獣らしくない話し方するのは魔獣は始めてみる。

「シラユキ契約は一生ものですよ。魔獣としての自覚はないのですか」

本来、このように棚からボタモチ的な幸運などありえないのだ。

まだ幼生体だが、SSランクの魔獣だ。

これが成長しきった時の成体の姿を思うと、どれだけの人族が欲しがるだろうか。

SSランクの魔獣を所持する魔獣使いとなると、片手分もないだろう。

「契約すれば、死ぬまで私に使役されることになります。まだ幼生体である貴方に、その意味が分かると思わないのですが、かと言ってこのままでは貴方を連れて歩くのは危険だろうし……」

セルフアは考えこんでもどうも出来ないことに、シラユキと契約するしかないとわかっていた。

「なあ兄ちゃん。こいつも契約できないか？」

話をずっと聞いていた小人族のカイが、樽からだした。謎の卵を転がしながら聞いてきた。

「カイくんそれは、非常食とかじゃなかったのですか？」

てっきり大きめ卵を、非常食として持ち込んでいたのかと想像していたのだが違ったようだ。

「違うよ。俺たちを捕まえた人族のおっさんがさ。こいつも世話しろって渡されたんだぞ。逃げるときに大河に沈んだら可哀相かと思っで一緒に連れてきたんだ」

かなり重くて苦労したらしいが、なんとか転がしてここまで運んだと言っのが卵の真相らしい。

『この子まだ卵だけど、私たちとは会話できた…』

ミルが卵をなでてあげている。

小人族が世話をしていたのは、卵に話しかけたり時折卵を動かしたりくらいだと言っ。

「これ何の卵なんですか？卵生の生物となると、孵化すれば出てくるのは鳥類か爬虫類か両性類？」

卵の殻の色はやや薄くブルーが入っており、水の属性の卵だろうと予想がつくくらいで、何の卵なのかもサッパリ分らない。

「孵化するとしても、いつか分らない上に、どのような状態にしておけばいいのか…」

何の卵かも、わからないのでは対処が難しいではないか。

『この子、自然の気を吸って育つ珍しい生物としか言われなかった。卵の殻が割れる時は孵化する時で、それまではどんなに高い場所から落としても絶対に割れないって』

エルたちは、この卵を人族のおっさんが実際に割ってみせる感じで硬い石畳とかに落したりしたのを見たのだと言っ。

孵化する時に最初に見た相手に懐くらしいので、余程のことがない限り危険はないらしいとのことだ。

「そうですか。孵化しなければ契約もなにもありませんので、これ

は孵化するまで様子みるしかないですね」

生きている卵を道具袋へと入れるわけにもいかないだろうし、セル
ファは卵入れでも作って運ぶかと考えた。

異界の魔獣使い 5

5

魔方陣が作動しているとわかってはいても、大河から聞こえてくる妖獣・魔獣の鳴き声

にエルがビクビクと反応している。

「火の番は私がしているので、先に寝てかまわないですよ」

セルフアとエル以外は、すでにテントで眠っている。時折シラユキとカイの寝言が聞こ

えてくるくらいで、ミルは寝相が良いのだろう静かなものだ。

「大丈夫です。セルフアさんこそ助けていただいて、本当に助かりました」

改めて御礼を告げる。

「たまたまお互い運が良かっただけのことです」

気にしなくて良いとセルフアは告げる。

「それでも、お礼は言わせてください」

「貴方は律儀な性格のようですね。エルさん、貴方は『死に戻り』をどこで知りましたか？」

焚き火の炎が消えないように、枯木をくべながらどれだけのことを

知るのが聞く。

『私が捕まっていた人族の所に居たのは、5年ほどです。その期間に二人の雇われていた冒険者が『死に戻り』でした。ミルとカイは、ここ1年の間に連れてこられたのでそのことを知りません』

「そうでしたか。私の方は噂程度には聞くのですが、自分が『死に戻り』だと言いつらすような人物は見かけたことがなかったですね」
『死に戻り』『黄泉返り』の当たり障りのない話は聞くが、どれだけの者がその状態になっているのかさえ不明だ。

『セルフアさん。私が知っていた『死に戻り』の方は二人とも死んです。自分が変わることに耐えられず死を選んだ。いえ狂ったとしか言い様がない有様の果てに死にました』

セルフアも『死に戻り』だと言うのなら、そうなってしまっておかしくないのだとエルは言う。
助けてくれた恩人がそうなるのは辛すぎる。

「大丈夫。エルさん貴方には話しておいた方が良いのではないかと考えてはいるのですが、今はまだその理由を話せそうにないです。ただ確かに『死に戻り』は変わります。以前の私であれば、このように”私”と言った話し方はしませんでした。年齢相応に”俺”と言っていたはずなのですが、気づけば私と言

方を変えてます。

『死に戻り』の影響でしょうね」

同じように『死に戻り』の果てに狂い死にした者たちは、変わる自分に恐怖したのではないかと考える。

適性があるかないかの違いなのかわからないが、それくらいしか思いつかない。

『わかりました。セルフアさん。いずれは話てくださいね。』

「ええ いずれ話せる時がきたら話ます。おやすみなさいエルさん」

明け方までセルフアは魔方陣と周囲の様子をみつっ静かな夜を過ごす。

いつの間にか転寝してしまったらしい、うつすらと空は明るくなりつつあるが大河のすぐ側のせいかな

朝靄が川面を隠している。

焚き火は消えかけ燻っていた。

夜に聞こえていた妖獣・魔獣の気配も消えているように見えるが、水辺に近づいてきた獲物を狙い

潜んでいる可能性もある。

無闇に水辺に近づかない限りは安全だろう。

『おはよう』

シラユキがテントの中から出てきて猫科特有のしぐさをしながら、

大きく伸びをしている。

後ろからエルとミルが目を擦りながら起きてきた。カイはまだ寝ているようだ。

「おはよう。朝の準備はするので、死にたくなければ水辺には気をつけてください」

『????なんで?』

首をかしげるしぐさが可愛い。

「水辺に水を飲みに来た獣がいたとします。それを待ち伏せしている水棲の妖獣・魔獣の餌にされたいなら好きにどうぞ」

『……………』

自分が引きずりこまれることを想像してか、ブルブルと震えてうなずく。

「ただし、後ほど水辺に流れ着いていた荷物を見にいきますからそれまで近づくのは我慢してください」

流れ着いた魔道船・ヴァンガード・の積荷の一部を確認しておきたい。

「今日もここで過ごします。ある程度の準備をしないことには移動は無理です。そうそうシラユキこれを」

隷従の首輪と言われ外した首輪だった。

「解析して分かったのですが、隷従の魔方陣と追跡の魔方陣を組み込ませていたのは真ん中であつた

大きな宝石だけでしたので外してあります。いずれそこには別の宝石いれてあげますので、残りは普通の首輪として使えます」

『わーい……そのキラキラつけて』

どうやらシラユキはキラキラしたものに目がないようだ。

「そして、エルにミルこれを」

差し出されたのは小人族サイズに作られた小さな三つの簡易リュックだった。

「見張りが暇すぎて、卵入れ用の袋作るついでに作りました。今はまだ入れられる物がそうないと思

いいますが、おいおい自分の物が増えると思うので使ってください」

『セルフアさんありがとう』

エルが嬉しそうに言う。

『……セルフアさ……んお母さんみたい』

ミルも嬉しいのかもらったリュックを抱きしめつぶやく。

「私は朝食準備をしますから、焚き火の火の用意をお願いします。」

道具袋から取り出す食材で簡単なスープに、パンとシラユキには肉を炙つただけで大丈夫だろう。

異界の魔獣使い5（後書き）

感想下さった方、評価してくれた方ありがとうございます。
まだまだ感想おまちしてます。

異界の魔獣使い 6

6

道具袋から新鮮な野菜を取り出す。

旅立ちで購入したばかりの物ばかりだから、種類はかなり豊富のようだ。

肉類はベーコンと干し肉と生肉が入っている。

乳製品に生卵まで入っているとは侮れない。

用意したのは自分じゃないんだがなと思いつつも、とりあえず作れそうな

スープをさつさと作ることにした。

調理用具から調味料まで各種色々入っていた。

これらを道具袋に入れてくれた者は、余程の食い道楽ではないだろうか。

とりあえず時間がかからず簡単なスープを作り、道具袋からパンと飲み物も取り出す。

「シラユキ、肉は生？少し炙るのもうまいと思うが・・・」

どのくらいの肉の量を食いたいか聞いてから、何の肉かわからないが切り分ける。

『生！生がいい』

「わかりました。先にどうぞ」

シラユキの前に生肉を入れた皿を出す。

「エルさん 小さな食器がないので昨夜同様に3人で分けて食べてください」

「ありがとうございます。なにからなにまで。カイもいい加減そろそろ起きなさい！」

エルに起きろと揺さぶられカイがやっと起きてきた。

「にーちゃん・・・おはよう」

ふぁーとまだまだ眠たそうにあくびをする。

「ほらシャキツとする！」

「カイは・・・ねぼすけ」

ミルが寝起きのカイをからかう。

「ほらちゃんとこれ持って」

自分たちに合うサイズに木を削って作ったスプーンを渡す。

「パンがやや固かったので、スープに浸しておいたのでそのまま食べてみてください。」

飲み物は、なんとかコップになりそうな木の実の殻を利用して、そこに入れた。

「食べながらで良いので聞いてください」

セルフアは、食後は川辺に行き、流れ着いた荷物を確認し、それが終わったら今後、どう行動をしたいのか話し合うので考えておいて欲しいと告げる。

『にーちゃん。これうめえな』
カイが、なかなか噛み切れないのかベーコンの塊に苦勞してるようだ。

『そういえばセルフアさん。家族に無事は伝えなくていいのですか？』

自分たちと違って、セルフアには心配してくれる家族がいるのではないかと思ったのだ。

「・・・そうですね。確かに身内はいますが、今は不味いです。見つかったら確実に軟禁されます！」

『軟禁！』

なにそれどこの犯罪者？

「ええつ。私の場合は、そこそ良い家柄もあって『死に戻り』したと知られたら軟禁されるのは確実です！」

精霊契約が廃棄されたのは、身内には即わかったはずだ。

自分が死んだと精霊が判断した時点で、精霊憑きの剣が身内の所へ戻ったはず。

やや過保護な身内が、なんの精霊とも契約していない自分を外に出そうとしないだろうことは確実だろう。

『にーちゃんも苦勞してんだな』

「ええつ。なので、早急に新たな精霊契約および魔獣使いとしても使えるようにならないと不味いです」

でないと見つかった時点で、一生閉じ込められることもありえるのだ。

自分を心配してくれて、守るつもりなのだろうと分かってはいてもあそこでは自由は余りない。

『大丈夫。・・・シラユキ、セルフア守る！』

生肉を食べ終えて、毛づくろいしつつシラユキがそう告げる。

「そうですね。早く大人になって、一緒に訓練しましょう」
シラユキの大きさなら、後半年ほどで成長しきるのではないだろうか。

それまでに見つからずなんとかしなければならぬ。

いつそう魔獣使いの里に、住み込んでしまうのもアリではないかと考えたのだ。

異界の魔獣使い6（後書き）

書いていてお腹すいてきました。
どうもなかなか話が進みません。

感想おまちします。

異界の魔獣使い7（前書き）

前置きが多すぎたのか話がなかなか進みません
どこが魔獣使い？と思われるかもしれませんが
おいおい進んでいく予定です。

異界の魔獣使い 7

7

太陽が眩しい。

今日も晴天になるようだ。

食事を済ませ片付けを終えたセルフアたちは流れ着いた荷物を確認に川岸に向かう。

昨日までは助かることしか考えていなかったので、

荷物が流れ着いているなと思っていた程度だが、

大河を見れば今だ色々と流されているようだ。ほとんど見た限りでは魔道船の残骸ばかり。

川岸には流れの関係か、色んな物がかなり流れ着いている。

昨日みた、かつて人間だったものの一部とかは消えていた。

夜のうちに死肉食いの妖獣が魔獣が掃除したのだろう。

「運べない大きさの物を見つけたら言ってください。ああ、川には気をつけて」

セルフアはポケットからシラユキの首輪に付いていた宝石を取り出すと、

大河に向かって子供がよくする石を水面に飛ばす石投げをする。

綺麗にカットされていた宝石は、キラキラと光ながら何度か水面を跳ね大河に沈むと思われたのだが、

跳ねていく宝石に大口を開けた巨大な魚のような生き物にあつという間に喰われていた。

「ああなる可能性もあります」

つくづく昨日は運が良かったと思う。

犠牲者には悪いと思うが、大河にいた妖獣・魔獣の腹が満たされていたから襲われなかっただけなのかもしれない。

『すつげー。あんなのがうようよしてんだここはへーとカイが大河を見て言う。』

『もつたいな〜い』

あのキラキラ石欲しかったなあと思うシラユキだが、隷従とか追跡されるとかの意味を深く理解しきっていないようだ。

「これで当面は大丈夫か、追手が追跡を辿っても、大河の中と分かればそれ以上は探さない。

希少な宝石でもこの中に入り探すのは無理」

シラユキの背に乗る小人族三人は、宝探しだと散らばった。

「とりあえず運べそうなものから見るか」

流れ着いているさまざまな木箱を物色する。

見つけた木箱は、はじから道具袋へといれてしまうことにする。道具袋の大きさから見て普通なら入らないと考えられるものばかりなのだが、

一部の冒険者ご用達の何でも入るこの袋はかなり便利な品物だ。

買うにしてもまず売ってない。高レベルの冒険者にしか出回らないこともあって数は少ない。

（作られる数がなかなか増えないため、一般にまで出回ることがないのが理由なだけだが）

あらかた見える範囲にあった木箱を入れてしまう。

まだ川岸の水面に漂っている木箱もあったが、そちらは危険を考えあきらめることにした。

シラユキ達が見つけたものも、どんどん入れてしまい確認はおいおいすればいいだろう。

道具袋のなかにある限り、生ものだろうが腐ることもないのだ。

「こんなもんですかね。さて今後はどうするか決めますか」

『シラユキはセルフアについてく』

『俺たちは、いずれエライザの森に帰れりやいつでもいいって話し合った。』

こうして生きてるだけでも運良いし、にーちゃんに付いてくのも面白そうだしな』

小人族の三人は、エライザの森は直ぐには無理と理解して話し合っ
て決めたことを告げる。

「わかりました。とりあえず何年かかろうが、いずれはエライザの森へ連れて行くことを

私は約束します。そしてこれを見てもらえますか」

道具袋から取り出したのは、エブラード王国のおおまかな地図だった。

大河ムーリルヴァはやや太い線でかかれており、王都エブラードの位置が確認できる。

「私たちが流された大河ムーリルヴァですが、現時点ではどの場所に居るかわかりません」

王都エブラードから、大河ムーリルヴァの下流にある地方都市ムルヴァーラ

「このムルヴァーラの方が近いはずなので、ここを目指します。魔獣使いになるためのツテはあるのでその辺は大丈夫かと思いますが、

何年かかるかわかりませんが魔獣使いの里へ行き訓練することになるので、シラユキ覚悟しておいてください」

『セルフアさんツテって、このムルヴァーラに魔獣使いの知り合いの方でもいるのですか？』

「ええ。友人が住んでいるはずです。黒い狼系の魔獣を使うんですがね」

ムルヴァーラまでは空からの魔道船なら半日、馬車で3日、徒歩で1週間ほどの距離になる。

かなり流されていたので、徒歩の半分ほどの距離を歩けばたどり着く可能性が高いと考える。

大河ムーリルヴァに平行した石畳の道が整備されているため、迷うことは少ない。

道中の妖獣・魔獣に夜盗さえ注意していれば良いだけだ。

「本来なら、この大河ムーリルヴァを船に乗り下る手もなくはないのですが、

そのための大型船もなければ妖獣・魔獣除けになる魔方阵もないためできません。

ここは地味に歩くしかないです」

こうして大まかな方針が決まったことで、セルフアは魔獣使いになるべく進みはじめることとなる。

異界の魔獣使い7（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

感想、誤字、文法の間違いの指摘ありがとうございます。
おいおい直していく予定です。しばしお待ちください。

異界の魔獣使い 8

8

ムルヴァーラまでの距離は、おおよそ二日で済んだ。

一日目はなんとか歩き、二日目の途中で荷馬車に乗車できたからだ。綺麗にならされた石畳の道を歩いていると、ムルヴァーラまで戻るらしい荷馬車が近づいてくる。

「あんちゃん、乗っていくかい？後ろなら乗せてやるぞ。魔獣使いとみたが…」

人が良さそうなおじさんが、荷馬車を止めてくれた。

「ありがとうございます。たいしたお礼もできませんが、かわりにこれをどうぞ」

渡したのは、荷馬車利用する時の大体の料金分のお金だ。

「まだ見習いで、これからこの仔の訓練に向かうんですよ」
噛み付かないし可愛いものですよ。頭なでて見ますか？と差し出す。

シラユキには先に愛想良くするように言い含めてあるので、噛み付くこともなく撫でられている。

小人族の3人は人族に見つかるややっかいなため、帽子のなかに隠れてもらっていた。

「ほほう。なかなか可愛いものだな。これは地彪の仔かい？色が白いようだが」

一般的に彪と認識されているのは、地彪である。
地彪は大抵の山林におり、魔獣使いのなかでも良く見かけるのである。

「ええたまに居る色素がない仔なので、体が弱いのが心配なところですねえ」

大嘘である。希少性の高い白雪彪の仔ですとは言わないが、適当に体が弱いらしい
幼生体だったせいで親が捨てたらしく、運良く手に入れたとだけ告げる。

「自然の掟も厳しいってことだな。さっ乗ってくれ」

荷馬車の主に礼を言ってシラユキを先に乗せると自分も後ろに乗った。

「そういえばここ数日大河が騒がしかったんですが、何かありましたか？」

魔道船の事故前から、この道を歩いていたんで、大河に浮かぶ残骸とか見たことはなして様子を見ることにする。

「ああ。なんちゅう名前かしらんが、大型の魔道船が大河に墜落して沈んでよ。」

乗っていた連中も助かったのは僅かつてはなしだ」

「へーこの大河なんて妖獣・魔獣だらけじゃないですか」
おお怖つと身震いするような仕草をする。

「んだなあ」

当たり障りのない話を荷馬車の主としながら最近の話題などを聞いて過ごしたのだ。

荷馬車の持ち主から聞いた話では、王都周辺は一時混乱で凄いことになったらしく、大河の妖獣・魔獣討伐に冒険者ギルドや騎士ギルドに傭兵ギルドまで招集されたようである。

それでも討伐以前に、ただ見ているしかない状態だったようで、数少ない泳いで助かった者たちの支援に尽力していたとのことだった。魔道船に乗っていて転移の魔法を使えた者だけが無傷で助かったようだとのことだが、ほとんどがお貴族様だけであり一般の平民は絶望的とのことだ。

「まあ、死んだと思われてるかなこれは」

荷馬車の主に聞こえないように呟いた。

セルフアは連れ戻されない為にも、適うなら再度の精霊契約と魔獣使いとしても使いこなせるようにしようと改めて思うのだった。

「きゅ……う？」

何か言いたいらしいシラユキだが、他人が居る前では彪らしくするよう言い含めてあったのでしゃべることはないがかなり不満そうだ。

「今も王都は混乱してるかもしれないなあ。犠牲者半端ないって話だ。身元確認しようにも妖獣・魔獣の腹の中か、船に閉じ込められたままの溺死だろう魔道船を引き上げるのも無理って話なのと、流された積荷を手に入れようとした馬鹿者が餌食になったって話も

聞いたしなあ」

荷馬車の持ち主と世間話に講じつつ、最低限の情報を手に入れたセルファだった。

ムルヴァーラには夕暮れ前になんとか到着をした。

「おじさんありがとう。思っていたよりも早く到着できた」

「良いつてことよ、こっちも臨時収入入ったようなもんだしな。またなににいちゃん」

去って行く荷馬車に手を振り、魔獣使いギルドへ向かうことにする。夕暮れ前のムルヴァーラは、家路を急ぐ者や歓楽街へ向かう冒険者の姿があちこちに見えた。

「さてシラユキ良い仔だ。もう少しの辛抱だから我慢して」

『ニア……』

シラユキを誰かに盗まれても困るので、抱っこしつつ移動する。

異界の魔獣使い 9

9

ムルヴァーラの門をくぐり、道の両脇に並ぶ露店を眺めつつ広場の方にまっすぐ進んで行く。

夕暮れ前にもかかわらず、露店を営業する商売人たちは、大声を上げおのおのの商品を売り込むことに余念がない。

「魔獣使いのギルドはっと…」

確かこの先の広場に入ってさらに右の道の奥の方だったはずだと、記憶を確かめ進む。

抱っこされたままのシラユキは、珍しさから周囲をキョロキョロと見回している。

見れば魔獣を連れた者たちがかなりいた。

狼、獅子、熊、彪、蛇、龍と見かけののだが、どれも厳しく躰けられているのか飼い主の側でおとなしくしている。

周囲も慣れているのかビクついていような者はいない。

ただ街中だけあって、用心の為なのか、大型の魔獣は口輪を付けている。

「驚いたかい？ここ出身の魔獣使いは、エブラード王国一と言われている」

ムルヴァーラの四分の一の大きさを占めているのが、魔獣使いギルドなのだ。

いわばムルヴァーラは魔獣ギルドの為にある都市であった。

危険の大きい魔獣が人が大勢住むような場所で、絶対に暴れたりしないように厳しく躡けて管理されているのだ。

広場から右の道を更に進んでいけば、獣特有の臭いがする。この道を入ったあたりから、魔獣を連れている人しか通らないようだ。

魔獣使いギルドは、扱うのが魔獣だけあるせいか、かなり大きな地所を所有しているのか、用心の為かぐるりと門で囲っているようだ。扱っているものが魔獣である以上、何が起こるかわからないからだろう。

門には見張り番が立っているが、特に声をかける必要もなくそのまま進む。

魔獣使いギルドと呼ばれる建物には、初代の設立者が所持していたと言う

狼を模した旗がかけられており、面白いことに5階建ての建物に入り口が3つほどあった。

それだけでなく、見える範囲では夕暮れの訓練を始めるのか複数の魔獣使いが

訓練棟らしい小型のコロッセオのある方へと向かう姿も見られる。

そして上空からは時折、大型の鳥や龍といった飛行可能な魔物が降下してくる姿もみられた。

「もう少しだけ黙っていて」

入り口が3つあるが、どこから入っても良いようだ。

魔獣によっては、やはりどうしても相性があるのかどんなに躑けしても、

ここでたまたま会った魔獣同士で喧嘩しないとは言いきれない状態になることも

あるようで、出入り口を増やすことでかちあわないように気をつけているのだ。

比較的小型の魔獣を扱う受付に向かう。

「すみません。ギルド長に会いたいんですが、居ますか？昔馴染みなんで会って話したいことがあるんで」

受付に居たのは犬耳を持つ獣人の男性であつた。

受付業務は、魔獣を扱うことを考えて、男性しかしていないようだ。奥の事務処理や喫茶する場所では女性も働いているのが見え人族だけでなく、ちらほらと獣人などの姿も見えた。

『少々お待ちください。…ギルド長ですが、現在は魔道船の事故処理の支援のため王都エブラードにいるようです』

管理職の予定表の見てそう告げる。

「タイミング悪かったか。そうですか、なら不在のギルド長の補佐に誰がここにいるか分かりますか？」

『ギルド長の妹さんの、エスティアさんですね』

「わかりました。エステシアとも昔馴染みなので、面会出来るように話通してもらえませんか？会いたくないと言われても、会わないと絶対に損すると伝言してくれれば会おうとしてくれるはずなので」

『かしこまりました。面会用に、そこに見える階段で2階に上り左側を進んで行くと、

6と書かれた扉の部屋がありますので、そこに入りお待ちください。

』

受付に礼を言ってセルフアはシラユキを抱えなおすと、言われた部屋へと向かう。

シラユキと言えば、見るものすべてが珍しいのかキョロキョロと世話しく首が動いている。

色んな種類の魔獣使いを見れるのは、このギルドだからだろう。小型から大型までかなりの種類の魔獣が見れるのだ。

時折、魔獣の唸り声が聞こえるが皆慣れたものだ。

「ふう〜。なんとかここまで無事着いた。お疲れ」

エステシアが来るまで椅子に座り待つ。かぶっていた帽子を側のデスクに置いた。

『すげ〜なにーちゃん。魔獣だらけだ』

ごそごそと帽子から出てくるのはカイだ。エルはミルが出てくるのを手伝っている。

「その為のギルドだしね。シラユキも良い仔だ。魔獣は、喋れる個体もいるにはいるんだけど、流暢すぎるのはまずいんだ」

『ふうんそうなんだ。面倒だ……』

ぐぐつと体を伸びしながらシラユキはセルフアの横に座り毛づくろいをはじめめる。

「だから人が多い場所で喋るなら、カタコトにすることかな。あと猫科の魔獣らしい唸り声とか鳴き声かな」

『ニヤア…とかデスカ』

「そうそう。用心しとかないと、シラユキを連れさらう馬鹿も出てくるからね」

軽く雑談をしていると、廊下の方から待ち人が来たのか騒がしい。

異界の魔獣使い 10

10

魔道船の墜落事故もあり、今後その処理をどうするのか王都エブラードへ向かった

ギルド長である兄の代わりに、執務室にいるエステシアは、兄が溜め込んだ書類の山にうんざりとしていた。

「だいたいあの人は、なんでこうも毎回毎回私に書類の処理をさせるんだ……！」

兄がきちんと処理していれば、自分がする必要がないものである。

コンコンとドアをノックして、兄の付き人の一人が入ってくる。

「失礼します。ギルド長の昔馴染みと言う男性の方が訪ねてきています。」

話したいことがあるそうなので2階にある6番の部屋にお通ししてあります」

「え……兄の知り合いなら私はパス！面倒くさい……これ見なよ。この仕事の量！」

人に会うことまでさせんなと、バンバン叩いて机の上に溜まる書類の山を見せて言う。

「ですが、その方はギルド長だけでなく、貴方とも昔馴染みらしい

ので、会わないと

絶対に損をするとおっしゃっていたそうなので、会っただけ会わないと困るかもしれません」

「なにその謎かけ……。ん……。しゃあないわ会つか。んじゃ行ってくるから、

書類処理の終わったものは机の上の処理済棚にあるから後の処理よろしく〜」

ヒラヒラと手を振って執務室を出る時に、部屋に居たエステシアの魔獣が肩に乗ってくる。

『エステシア、ドコイク?』

「知り合いが訪ねてきたらしくてさ、これから行くところだよ。ステラ」

肩に乗ってきたのは鷲型の魔獣だ。この魔獣の特徴は自分の大きさを自由に変更する

ことが可能なため飛行型魔獣の中では人気の高い種である。

当然、エステシアを乗せて空を飛ぶことも可能である。

『…シリアイ?』

「昔馴染みって言ってたからねえ〜まあ友達の誰かだろうさ」

ステラと会話しながらエステシアは昔馴染みが待っていると言う部屋にむかったのだ。

「誰だい？私に会いたってのは」

やや不躰な入り方かなと、チラッと思ったがまあ昔馴染みなら気にしないだろう。

「元気そうだね。エスティア……」

「……セルフア！……死んだって聞……いた」

兄からの魔道具を解しての連絡事項の会話でそう聞かされたのだ。

本当に本人なのかと、ガバツと抱きしめ確認をする。抗議のためかステラの声も

聞こえていたが無視である。

セルフア本人が確かめるのが先だ。

『ちよっとおばさん！…私のセルフアに、抱きつかないでくれる！』

シラユキが邪魔なんですけど、エスティアに噛み付く。

「イタッ……」

『なによ！このむちむちの脂肪の塊で、アタシのセルフアに抱きつかないで！』

目の前に現れた人族女、しかもむちむちのでっかい胸！

金髪で、青瞳で、いかにも頭が軽そうな美人にシラユキはシャーッと威嚇する。

「すまないエスティア……」

シラユキの首根っこを掴んで、噛み付いているエスティアから引き離す。

「いやこっちこそ、興奮しすぎた。駄がなつてないようだねこの仔」
ピンツとシラユキの鼻っ面をはじいて言う。

『イタツ！おばさんなにすんのよ！』

シャー、シャーッと首根っこつかまれたまま威嚇しまくるシラユキである。

「ああもつ。シラユキ大人しくしないか！」

興奮状態のシラユキを抱っこしなおして言い聞かせる。

『アタシ、このおばさんキライ！』

フンツとそっぽ向く。

「まったく…とりあえず誰にも聞かれない話があるんだ。この部屋は安全かい？」

まさかこうもシラユキが、エスティアを嫌うと思わなかった。

「ああ大丈夫だ。しっかし死んだと兄から聞いたんだが、何故そう

なっているんだ？」

向かい側に座りつつ、確認の為きいた。

「いろいろあつて、まだ誰にも告げてないんだ。出来れば家に連絡をしないでくれないか」

どこから話すべきかと迷う。

『……あのうセルフアさんこちらの方は？』

帽子の影からそ〜っと見るのは小人族の3人である。

「紹介がまだだったね。エスティア。この3人は小人族で左からエル、ミル、カイだ。

昔馴染みの友人なんだよエル。怖い人ではないから大丈夫。そしてエスティアこの仔は

シラユキと言う」

抱っこしたままのシラユキは、まだ興奮状態なのか離さないように気をつける。

「……こ…小人族！……かつ…可愛い！」

噂にだけ聞いた小人族である。

小さくって可愛くつて、愛玩したいと思う？1な亜人種だ。

「これ……ほしい！……セルフアちょうだい！」

ハアハアと危ない人になっているエスティアだ。

その変わりようにビクッとなる小人族の3人は、帽子の影に隠れつつ恐る恐る姿を

見せては、またビクッとなることを繰り返していた。

異界の魔獣使い 11

11

エステシアの興奮ぶりにやや引いていた小人族の3人だったが、怖い人じゃないとわかって安心する。

『にーちゃんこの人、大丈夫か?』

主にお頭おつむのほうは大丈夫なんだろうかと、カイが聞く。

「まあ…女性はや可愛いもの好きだしね…」

『こつちに危害こないなら、どうでもいいけどさ』

エルとミルを守るのは、男である自分だと思っているカイだ。

「悪いね。こつちも小さいものに反応するとは思わなかったしな。さてエステシア興奮する

のはやめて話を聞いて欲しい。家に連絡いれなくて欲しいと告げたのは、現在の私には契約している精霊がないからなんだ」

「えっ!………」

ガバツとセルフアの右腕を取ると、手の甲を確認する。右だけでなく左も同様である。

「銀朱ぎんしゅに紫紺しこんの印がない……!」

「ああ…蘇芳^{すおう}に代赭^{たいしゃ}もだ…」

「馬鹿な…ありえない！精霊契約は一生ものはずじゃなかったのかい！」

「イレギュラーなことが起きた。魔道船・ヴァンガード・の事故に巻き込まれた時に

『死に戻り』したようだ。この世界の記憶とは別に、もう一つの人格が今の私にはある。これがどんな結果になるのか予想がつかない状態だ」

「『死に戻り』だと！…いや…確かに…」

何かを思い出すように、エステシアは自分が知る『死に戻り』のことを思い出す。

エステシアが知る『死に戻り』の関わる記録は、最悪な結果のことばかりだ。

10年前に起きた、大盗賊グランの大虐殺、8年前に起きた魔道師ルネの地方都市

ガナイの消滅までもつと過去にも大規模な災厄を招いた者たちがいたがきりないほどだ。

これらの事件の首謀者は『死に戻り』であつたことは各ギルド上層部と国の一部の上層部が知るだけだ。

あえて一般には知られていないのだが、『死に戻り』とは今現在の自分とは別の人格が

発生することと言われており、前世の記憶とか別人格が新たに生まれたと思われている。

『死に戻り』に耐え切れない者も多く、大抵は自死を選ぶ。が、ごくたまにそれに耐え切った者が大規模な災厄を起こすため、混乱を避けることも考え一般に知れ渡ってはいないのだ。

「なんかね。私の中の人？まあ不思議な感覚なんだが女性だね。聖王と同じ世界の

出身ばくて普通の主婦で、子供３人生んで孫は５人いたらしいね。死んだのは８９歳

らしい。孫もいて、満足いく死に方だったようだね。スズ・アララギだったさ。

『死に戻り』で発生した人格は、ランダムでどの世界から来るか知らないが、

比較的平和だった世界から来たようだし、それほど心配しなくても大丈夫じゃない

かと考えているんだけどね」

なんでもないことのようにセルフアは、告げた。

小人族のエルにも心配しなくても大丈夫だと言う意味も込めて話す。

「……確かに、セルフアの家に連絡はできないな……」

『死に戻り』と発覚した時点で、幽閉されて一生を終わらせることは確定してしまうだろう。

「そんなわけで、死んだことにして自由に生きようかと思ったんだ。」

『そうよ…セルフアはアタシというもの…おばさんは邪魔しないで……』

落ち着いたらしいシラユキが、セルフアに撫でてもらいながらつぶやく。

「この騾のなつてない彪はなんなんだ？」

「それなんだが、魔道船・ヴァンガード・の積荷に魔獣があつたか調べることでないか？」

小人族の3人も浚われていたことを話す。

「……密輸されていた可能性がある？」

「多分だね。あとこのシラユキ。よく見て欲しいんだけど、どの種の彪に見える？」

「地彪のアルビノではないのか？他の魔獣にもアルビノはいるからな。それにしても」

口が達者と言つか地彪らしくないしな……」

しげしげと見るが、エステシアがキラいなシラユキはフンとソツポ向く。

「……まさか白雪……彪か？」

よくよく見れば地彪にない特徴が見られる。

『ちよつと……なに……』

ふっふっふつと笑い出すエステシアに引くシラユキ。

「これが白雪彫の幼生体なのか！足の太さみせてくれ。牙の本数は？…」

ああでもない、こうでもないとしらユキのあちこちを触りまくる。

『……セルフア！…助け…モガッ』

口を大きく開けられ、牙の確認までされている。

「エステシアは魔獣フリークだ。まあこれからお世話になるんだし、我慢も必要だよ

しらユキ。そうそうエステシア。これなんの卵か分かるかい？」

水属性じゃないかと言うことだけ伝えるセルフアは、謎な卵をエステシアに渡す。

「自然の気を吸って成長するらしい。それ以外は小人族とは会話出来たみたいだ」

どんな風に会話したとか分からないが、セルフアが知ることを伝える。

「卵状態ではわからんな。うゝんオババなら分かるか…んっ……」

卵を転がしたり、光に翳したり、自分の魔獣のステラに見せたりするが、ステラには興味なさそうだ。

「とりあえず、これはオババのほう詳しいかもしれない。セルフアのことは兄が戻って

からどうするか決めるとして、ここにいるといつ見知った連中に見つかるか

わからないしね、オババの森へ行かないかい？」

「頼む。あと魔獣使いとしての登録できないか確認してほしいんだが……」

バグっている冒険者ギルドカードを渡す。

このカードは、本来なら他ギルドでも使えるカードなのだ。

「これまた凄いバグだね」

「ははは……新しく作った方が良いたら、セルフア・スズ・アララギで作れないかな」

自分の中にいるもう一つの人格、それが異世界から生まれ変わった自分の前世なのか、それとも『死に戻り』の恩恵で新たに生まれた人格なのかわからない。

ただ分かるのは、自分の中にいることだけだ。
そしてスズ・アララギの持つ異世界の知識？は、こちらでも使えるそうだと思いつながら。

異界の魔獣使い 12

12

エステシアが言うオババの森とは、魔物使いギルドの中にある森と言うよりも、

公園と言った感じの場所だった。

使役される魔物の環境を考慮して、病気や怪我の治療などをこの公園を使い行っているという。

水辺、森、岩場と多岐にわたるエリアに分けてエブラード王国の各地にこうしたフィールドがあるらしい。

そしてここは森をなるべく再現しているとのことだ。

「へー かなり本格的にしてるんだな」

魔物ギルドの建物の裏手から、最初は整えられた公園と言った趣だったものが、歩いて先へ進めば進むほど森と錯覚してしまう。

「年に数回だが、ここを訪れた子供が迷子になって捜索隊が出る程度には広いね」

「だろうな」

『なんだか懐かしい気がします』

エルがセルフアの帽子の上に座ってつぶやく。

愛玩用に浚われて、こうしてゆつくりと、森に入ったのはどれくらいぶりだろうか。

ミルとカイは、シラユキの背中に乗っている。

ここの普通の森との違いは、ある一定の距離で設置している外灯だろう。

発光する光る石を利用しているとのことだ。

「あれがオババの家さ。昼間は治療院にいて、それ以外はここで薬草などの世話してる」

詳しい年齢はわからないが、かなり物知りとのことだ。

木造の小さなコテージと言った家だ。家の前の畑には、種類豊富な薬草や花、野菜などが植えられている。

「オババゝいるかい？」

エスティアが先に声を出しながら家に入っていく。

「オバ……ヒヤア……」

悲鳴のような声にセルフアは何事だと駆けつける。

「ヤメ……ヒヤア……」

「フォッフォッええ乳じゃ。…んむ。揉んでもう少し大きくするとええぞ」

真っ赤になってるエスティアを、後ろから羽交い絞めにする感じで乳を揉みまくっていた。

「……………」

見なかったことが無難だなとセルフア。

まあエステアの胸が、揉み応えありそうな大きさなのは確かだが…。

「いい加減にしろ！…このエロババア。客の前でなにしゃがる！」

「フオツフオツ。ええ乳は揉んでやるもんじゃ！…さてのう。お客さんらしいがこんなババアになんのようにかえ」

「初めましてオババさん。エステアの友人のセルフアと言います。今日は見てもらいたい物があつて、こうして来ました。これが何かわかりますか？」

気を取り直してセルフアは、何の魔物の卵かわからない。卵を渡す。

「んむう…卵じゃな。水蛇か水竜あたりかもしれんが、まだまだ孵化せんよこれはのう。自然の気が足りておらん。まあこの森においておけばよからうかのう」

後数年は、このままではないかとのことらしい。

「へえ…。さすがオババ何でも知ってるんだな」

「そうですか。ありがとうございます」

「それはそうと、そこにいる小さき子よ。なぜ、森の子がおるんじや？」

セルフアの帽子の上にいたエルを見て言う。

森の子、小さき子は小人族をさす。

「主らの仲間なら、この森にもおるぞえ。」

「ええっ！オババ小人族が、他にもいるのかい？」

なんで教えてくれなかったんだと、エステア。

「んむ。おるぞえ。この森は安全じゃからのう。ほいほい小人族のことを話せるわけがないのじゃ」

オババ以外の者がいる時は、隠れているのだと言う。

小人族は、金になる。

浚われ売られてしまつてばかりでは、種族としても滅びてしまう。

こつした安全な場所に匿うことも必要なことらしい。

オババが言うには、狩られる対象の愛玩用の魔物もここで保護して
るとのことらしく、

魔獣使いでもなければこの中まで入ってくる者もいなければ、部外
者が立ち寄ることも

ないため盲点をついたとも言えた。

閑話1（前書き）

いつも読んでくれる方、感想くださる方、ありがとうございます。
どうも話がなかなか進まないので閑話入れてみました。

閑話 1

閑話 1

エブラード王国が所持している精霊憑きの武器は、刀剣類が8種、槍が3種、弓2種である。

これらは特異能力を持つ、聖王が創りし武器で、魔族との戦乱の時に創り出され、現在は聖王と親交の深い貴族に下賜されている。

聖王が持ちし天叢雲剣
あめのむすくものつるぎ

妖刀正宗、雷切、村正、村雨、静御前、萌葱、藤紫

聖王が言うには、覚えやすいか言いやすいで決めたとのことらしいが、異世界風の名の由来は分からない。

単に名づけが面倒で、適当につけりゃいいでつけた名前なのだが、それは余り知られていなかったりする。

さて

傭兵王と呼ばれる五大公爵の一人、ルクサス公爵家に下賜された刀は静御前である。

名前の通り刀の精霊静御前は、女性型の精霊であった。

「聖王殿！……一大事でございます……宝具殿に静御前が戻ってき

ております！」

宝具殿を管理する文官の一人が、あたふたと駆け寄る。

「……ルクサスの所だったな。次代に受け継がれたはずだが……」
さてどうしたものかと、思案する。

「聖王殿…至急、救援をお願いします…大河ムーリルヴァに魔道船が墜落しました」

慌しいことに、次から次へと問題が発生する。

「静御前は後回しだ。先に魔道船の救助に向かう。手の空いてる連中は全員救助にあたり、他ギルドへも救助活動の応援を出せ」

聖王の一言により、魔道船の救助を誰もが優先したのだがそれでも犠牲者の数は多く、助かった者も少ないと言う結果にしかならなかった。

それが半日前の出来事である。

「ルクサス、静御前が黙して語らぬ」

魔道船救助活動を終え、城へと戻ってきたが皆憔悴が隠せない。余りにも悲惨な現場であった。

水棲の妖獣、魔獣の尋常ではない数とただ無残に喰われていく者たち。

周囲に散らばる物言わぬ犠牲者。

聖王と呼ばれた自分の力でも、大河の水を堰き止めることは出来な

い。

わずかに助かった者の救助支援しか出来なかったのが齒がゆいばかりであった。

「…聖王よ。孫が死んだと言うことでしよう。静が黙して語らぬ理由は、孫も魔道船に乗っていたからです」

「そうか…」

聖王が創った武器は、持ち主が死んだと認識すると宝具殿へ戻るよう生体認識の魔方陣がかけられていた。

「我が家に伝わる銀朱ぎんしゅに紫紺しこん、蘇芳すおうに代赭たいしゃまでも、沈黙したままです。気が早い親戚連中が、是非に継がせて欲しいと名を挙げてますがね…」

「お前も大変だな。家を継ぐ道具としてあるわけではないのだが、そのことに気づかない。精霊の気が済むままにさせておけ。選ぶのは私たちではなく、精霊なのだからな」

「わかりました。大きくなりすぎた家欲しさの連中には、それが見えていないようですし」

『……我は…我が主を…守れ…かった…』

囁く声は、聖王が持つ静御前からだ。

「静、気にするなとは言えん。だが、この先次代へと受け継がれることに同じ様なことが起こるかもしれん。人と精霊では生きる時間が違う。人は先に逝くことを覚えておけ」

「聖王よ。次の次代が決まるまで、静を所持願えますかな」

次代が決まらない今の状態で、静御前を所持するものが次代だと思われる。盗難にあう可能性もある。

「無論そのつもりだ。文句がある者がおれば、私の名をだせ」

「では、しばしの間よろしく願いします。次代が決まりましたらまたその時に……」

そして主を亡くした刀は、しばしの間聖王の下にて留まるのである。

閑話1（後書き）

てな話が王都の方であつたわけです。

おいおいサイドストーリー的に閑話にて考えている話を載せていく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933y/>

エブロード王国物語 - 異界の魔獣使い -

2011年11月9日23時17分発行